



学校だより

7月号

令和5年6月27日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「桑の葉」

学校長 後藤 直樹

この季節、大切そうに両手で箱を持って登校する子。虫かごを持って登校する子。そして桑の枝を持って登校する子。この姿は毎年3年生の年中行事のようになっています。3年生から始まる理科では、昆虫の成長や体のつくりを学習しますが、本校では教科書にあるモンシロチョウの観察に加え、発展教材として各自がカイコを飼育しています。以前は市内でも多くの学校が教材としてカイコの飼育をしていましたが、餌の桑の葉を毎日多量に手に入れることはそう簡単ではなく、最近ではほとんど無くなっています。本校では、地域の方が毎年、桑の木の場所を教えてください、時期になると毎朝、枝を切って必要な子に配ってくれたりしています。本当にありがたいことです。子どもたちは、微かな音を立てながら見る見る間に桑の葉を食べ尽し、驚くような早さで成長を続けるカイコの姿を毎日ワクワクしながら観察しています。きっと、このような機会でもなければ、シルクの製品を手にすることはあっても、生きていくカイコに直接触れるという経験は、生涯の中で無いかもかもしれません。これからもこうした体験的な学びを大切にしていきたいと考えています。

ところで、桑の木は幹線道路沿いの植栽の中や、ちょっとした空き地など意外にあちこちに生えています。決してツツジやアジサイのように意図的に植えられ、大切に管理されているわけではありません。また、不思議なのは特に葉に毒や強い匂いを持っているわけでもないのに、他の虫は寄り付きません。生活科で育てていたハウレンソウや小松菜などは、日々病害虫から守ってやらなければなりません。丈夫で病気にも強く他にライバルの昆虫もいない桑の葉を主食に選んだカイコに、生き物の適応能力の高さも感じました。

本校は年間を通して、多くの地域の皆様が教育活動を支えてくださっています。学校地域コーディネーターを中心に、「さぶやまボランティアネットワーク」として組織化されており、先日も土曜参観の後、総会が開催されました。学校と保護者や地域がひとつになって、子どもたちを育てていくという姿は、私には公立小学校の理想的な形にも見えました。関係の皆様には、改めて感謝申し上げます。



見守り隊の荒井さんから桑を受け取る子どもたち